

被説話學上の、一個の研究問題である。

(二)兄弟の愛を作るものわ、

「蟬丸」 「春榮」

次のものわ、人情物語の中、右の項目の何れにも屬せぬもの、此章に於てわ、別に云べき事のない

「二人靜」 「夕顔」 「空蟬」 「碁」

第一章に於てわ、云べき事わ、先づざつと此位。

## 文選の解題

教授本 田 弘

### 第一 選者及選修の年代

文選の選者は梁武帝の太子蕭統字德施論は昭明といへる人なり。梁書第八卷昭明太子傳によると、太子は齊の中興元年九月武烈三年神武紀元一六六を以て襄陽に生れ、天監元年生れし元年立て皇太子となりしも、中大通三年繼體二十五年紀元一九一四月年僅に卅一歳にして薨せしを以て、終に帝位に上らざりき。太子天性聰敏三才の時より既に孝經論語を受け、五歳の頃は遍く五經を誦せしと云。貌姿舉止共に善くして而も仁孝、普通七年、母、丁貴嬪の疾にあるや、太子は永福省に還り、朝夕疾に侍し、衣帶を解かず、体素壯腰帶十圍減削過半毎に入朝士庶見者莫不下泣はどなりき。性寛和容樂喜怒色に形は

す、才學の士を引納して賞愛倦むなく、恒に自ら篇籍を討論し、或は學生と古今を商確し、問と繼ぐに文章を以てし、著述を率ね常となす。時に東宮書あると幾と三萬卷、名才並びに集り、文學の盛なる晋宋以來未だこれあらず。太子又山水を愛し、嘗て舟を後池に泛べしに番禺侯軌盛、此中宜奏女樂と稱す、太子答へず、左思招隱詩を詠して曰く、何必絲與竹山水有清音と、侯慙て止む。法獄に於ける賑恤を旨とし、天下皆仁と稱す。其薨するに及び朝野惋愕、京師の男女奔走し、宮門號泣する者路に滿ち、四方の氓庶及彊徼の民喪を聞て皆痛哭せりとぞ、其狀頗我か聖德太子に似たる所あり。

凡文選は支那詩文集の元祖たり。總集は既に晋よりありつれども選を以て名けたるは之が始めてなり文選理。即選本の元祖と謂ふべし。但し茲に文といへるは詩を分ちたる文の義にあらず、二者を包含したるものなり。拙堂文話に「詩本文中一体耳、故古與書易竝立爲經、至昭明之選猶收在」

文中、昌黎李杜頃分爲詩文、古詩者直文而已、言其押韻則古書之文比々有之、非獨詩也」と云へるが如く、者は詩と文との區別未たなかりしなり。漢魏六朝を経て文化漸く進み詩文從て澤に、之を聚めされは散迭の患あるを以て、太子自ら率先し、樂賢堂を建て、文選樓を築き、劉孝威庾肩吾徐防江伯操孔敬通惠子悅陵王瓘孔爍鮑等所謂高齋十學士(楊升菴慎文集)と共に前記三萬卷の詩文集を討議し、蕪穢を除き、清夾を選び、終に三十卷となせり。其選むや、棺を蓋うて其人定るの定義に漏れず、一も現存者の詩文をば取らざりしかば、後來の支那の選集は凡て之に倣へり。

太子が文選を選せし年代は明に知り難しと雖、太子の死より推せば、その二十左右より死に至る迄の

十年間に成れるには相違なかるべく、即ち我朝にては繼體天皇の御宇紀元千八百八十九年代聖太子の前四十五年に當り、西

曆にては紀元第六世の初に當れり。正に是六朝の文運盈たず虧げず、十分圓熟に達せる時代の産なりとす。

## 第二 編次の舛裁

本書は先づ戰國の末我紀元五世紀の頃より同じ十二世紀の半、支那にては六朝の末まで七百餘年の詩文を集めたるものといふを得べく、一方より見れば、此文選の一書能く秦漢乃至八代の衰を以て唐初に極まれる約千年間の文運の趨勢を示せるものと云ふべきも、又一方より觀すれば、詞花言葉を主とし思想感情を二の町に置ける浮靡の文學、更言すれば東漢亡ひ三國逝きて後晋より南北朝經て隋に至る迄所謂六朝時代の文學を代表するものといふ可し。即通常文選といへば誰しも直ち瑰麗纖巧の文を連想する所以は實に此所に存するなり。嶋村氏の説參考冒頭に掲ぐる太子の序文を讀むも其準の六朝的なること知りぬへし。蓋六朝には眞の文なく、眞の詩なく、只沒韻致なること文と擇ふことなき詩と、辭の整へること詩と擇ふことなき文とありしのみ。陶淵明を除き眞の詩人と稱すべもの恐らく一人もなかりしならん。

本書二十卷類を分ちて賦五十五篇、詩五百四餘篇、騷七三、詔一、冊一、令一、教二、策問三、表十九、書七、啓三、彈事三、牋三、奏記一、詩二十四、檄五、對一、設論三、辭二、序九、頌五、贊二、符命三、論贊十一、論十三、連珠一、箴一、銘五、誄八、書文三、碑文五、墓志一、行狀一、吊祭五、此篇數は余が持の文選正文べたりとす。則ち此の中最大部分を占むるものは賦詩の二類にして、文選の面目も亦た茲にあり

いふへし。

古來偏次のとにつき議するもの多し。例へば蘇東坡の如きは編次無法、去取失當といひ、其答劉沔書に曰く、「梁蕭統文選世以爲工以賦觀之拙於文而陋於識者莫流若一也、云々」。蓋し編纂の次第、部類に依て分つが故に、歴史的の觀念を妨ぐると尠からず。例せば賦類に於て始に京都の賦を擧げ、後漢班固の兩都賦を之に收めたり。然れども賦は早く既に前漢に始まり、司馬相如の上林賦子虛賦の如き殊に有名なりとす。ざるを之を游獵部に收めて後に置くは、誰しも遺憾とする所ならん。但し東坡の如く、去取失當といふは酷評といふへし。何義門の如きは、賈誼の鵬鳥賦を、編者が鳥獸部に入れしを難せるも、此等は實は無用の穿鑿たるを免れず。宋の陳仁子の文選補遺四十五卷は文選の編輯法を批難し且つ補へるものなり。其中に曰く「封禪書、天人三策、劇秦美新、更生封事、魏公九錫文、を存するは如何、史論賛に班范を取て司馬遷を取らざるは如何、陶淵明は詩家の冠冕なるに十中三たも存せざるは不當なり、詩賦を以て詔令奉疏に先だつるは君臣をして位を失し質文の先後をして宜しきを失はしむるものなり」と、蕭統を排斥すること甚たしきも、これ皆宋の眞德秀の文章正宗の説に私淑せし僻論にして、かの正宗は明理を主とし、此文選はもと文言を論する只一端に止まる。要するに各當有り。陳仁子の説は通方の論に非ず。且つ其補遺の部もいかがのもの多し(四庫全書參考)。服部南廓などは「六朝の文、昭明の選ヤウ、至極の上手なり、外の書に文選にをさめぬが有るを見るに以ての外にをどれり、鑑識まことに勝れたるものなり」とて大に蕭統を稱揚せり(湯淺常山の文會雜記日本文庫第二編にあり)。固より蕭統と雖、六朝時代の好尚につれて、詞形の浮靡なるにのみ重きを置ける弊は、確かに認むる所なり。るは屈原の九章の如き、聲調悲壯誦すべきものも、僅かに其一首

を収めたるを見ても知らる。拙堂文語にもいへらく

「六朝之文唯彭澤歸去來爲眞文章」次之者爲王右軍蘭亭序一而不入選何也中畧昭明六朝人意亦不  
ニ以レ此爲レ疑但其姓嘉綺靡而不レ貴古質一故蘭亭不レ入選耳」

尙詳細は、讀書齋叢書甲集中の文選理學權輿の終に出てたる前賢評論の所、若くは、古今圖書集成  
經籍典第四九六卷文選部の終を調ふれば可ならんか。

### 第三 文選の註解書

文選の信僣贅牙の文字に富める、げに支那人も解し兼ねたりと見え、其註解本の多く出てしては  
書經籍志、唐書藝文志、宋史藝文志、明焦竑經籍志皆古今圖書集成に拔出せり等をつさへに見ても行かば驚く

足りぬべし。かく數多ある中、唐の曹憲の文選音義、魏謨公孫羅兩人の注文、及び李善の註本古  
より弄はれしも前二者は今傳はらず。獨り李善の註のみ註解書の最良模範として今に盛に行は

。李善註は酈道元の水經註、斐松之の三國志註と相並て三大註と稱せらる。李善は極めて博學  
で、諸子百家の書已れの眼を注がざるものなく、當時の人呼て書篋書箱庫の意と云へり新唐書文藝傳其初め

註するや、主として文中の故事字句の出所を註して、其文義に及はず。然れども後ち覆註三註四註  
に及ては文義をも註したり。其消息は善の親族李匡父の資暇錄に詳なり。註事而忘義の批難ある

蓋し其初註を指すのみ。新唐書には、「書成以示邕、邕默然意欲有所更、善曰試爲我補益之、  
附事見義、善以其註不可易、故兩書競行」と、李氏父子の關係を小説的に記すれど、固より

稽の説なり。善の註は唐の高宗の顯慶三年、我齊明天皇の四年紀元三一八に成り、それを高宗に奉れる、

は初の上表に見ゆ、即ち昭明太子の世を距ると始と百三十年。

高宗より中宗睿宗を経て玄宗に至り、其開元六年（元正養老二。紀元一三七八）呂延祚と云ふ者呂延濟、劉良、張詠、呂向、李周翰をして更に文選を註せしめ、之を天子に奉る。世之を五臣註といふ。善註は六十卷なれども之は三十卷なり。其進書の表文に李註を斥して、「忽發章句、是徵載籍、述作之由、何嘗措翰、祇謂攬心、胡爲析理」と云ひ、自家を揚げて、「目無全文、心無留意、作者爲志、森紛可視」と稱すれども、其實李註を剽竊する所少からずといふ。蓋し善の四註は當時未だ傳寫して傳はりしのみにて廣く行はれず。呂は早くも之を得たればなり。然も輿論の公平は掩ふべからず。東坡も五臣註を謂て「僂儒之荒陋者反不及善と云ひ、朝にても南郭は「五臣註は一向にラチナキアシキ註なり」と云ひ（文會雜記）其弟子湯淺常山も文選章句に句讀音註を入るゝに及て善註はかりにて五臣註をば取らざりきと（文會雜記）要するに李善註を本とし、五臣註は單に參考とするに足るのみ。宋の代に至り五臣註に李善のを加へて、六臣註と名く而も兩註混淆して分別すべからず。明末毛子晋の汲古閣本に至り始めて李善註を得たりと稱すれどもこれだに眞の李善註にはあらずといふ。張鳳翼の纂註、簡約にして便なれども、間々李善の長を去りて、五臣の短を取る所ありて信憑すべきものにあらずと云ふ（森槐南氏の跋）

（四庫全書卷百八六總集文選註の所も參考）

#### 第四 文選中の作者附雜說

文選は上は春秋先秦の古より下に六朝の末まで、大凡千年間の名手、百幾十家の作に係る、されど「序」の部に收めたる卜商（子夏）が毛詩の序を除く時は、楚の屈原の諸作を以て本書中の最古なるも

のとす。

今文選理學權輿により選人即ち作家を時代に從ひ列擧すれば。

周四家

卜子夏

一篇數

屈原

五

計一四

宋玉七(賦四) 荆軻

一

秦一家

李斯

武帝

淮南小山

一

高祖

武帝

淮南小山

一

賈誼

鄒陽

司馬相如

七

枚乘

東方朔

王褒

三

李陵

蘇武

司馬遷

一

孔安國

楊雄

楊揮

一

劉韻

班婕妤

張衡

五(賦四)

班彪

班固

張衡

五(賦四)

孔融

禰衡

傅毅

一

楊脩

馬融

崔瑗

一

朱浮

王延壽

蔡邕

三

後十七家

漢十七家

史岑一 潘勗一 曹昭一

韋益一 他<sub>二</sub>一家<sub>一</sub>

蜀一家〔諸葛亮一

吳一家〔韋昭一

文帝六 曹子建植二三(詩一五) 王粲九(賦一詩八)

魏十五家 陳琳四 劉楨五(詩ノミ) 應璩五

吳質三 他ノ八家は武帝を初とし皆一篇宛 計六三

張華六 秘山康六(詩三) 阮籍三

陸機二八(詩一六) 陵雲四(詩ノミ) 潘岳一九(賦八)

潘尼四(詩ノミ) 張載三 張協三

孫楚二 何劭三(詩ノミ) 郭璞二

劉琨四 盧諶五(詩ノミ) 于寶二

左思四 曹植二(共三詩) 石崇二

陶淵明八 (挽歌一首ト有名ナル歸去來辭ノ外皆純詩)

般仲文二 他ノ二十六家ハ羊祐ヲ初トシ皆一篇宛 計二三八

晋四十六家



謝靈運 三二(樂府一の 外皆純詩) 謝 瞻 五詩ノ三 謝惠連 七詩五

謝 莊 二 顏延之 二二二 鮑 昭 一一(賦二、樂府一、詩八)

宋十六家

危 暉 六 傅 亮 四 袁 淑 二

王僧達 三 他ニ謝混、王徽、劉鑠ノ三氏ハ各一ツ 計九七

齊六家

謝 眺 一三 王 融 三 陸 厥 二

王儉、孔稚珪、王巾ハ各一篇宛、計三一

任 昉 一九 江 淹 六 邱 遲 三

梁九家

范 雲 三詩ノ三 劉 峻 三 沈 約 一七(詩二三)

陸 倕 二銘ノ三 他ノ二家一ツ宛 計五三

更に無名氏の詩二十三篇あり

此表を以て見るに、蕭統の六朝時代に重を置き、殊に晋宋に詩を多く取りし事を了すべし。而も後世に有名なるは却て上代に多きが如し。例へば屈原の離騷經、宋玉の風賦、神女賦、好色賦、荆軻の易水歌、李斯の上始皇書、古詩十九首、高祖の大風歌、武帝の秋風辭、賈誼の過秦論、吊屈原文、司馬相如の子虛上林の兩賦、枚棄の七發、東方朔の益客難、揚雄の甘泉羽獵の二賦、劇秦美新、班婕妤の怨歌行、班固の兩都賦、孔明の出師表等概して三國時代以前のものなり。其以後にありては木華の海賦、嵇康の琴賦、左思の三都賦、潘岳の閑居賦、謝惠連の祭古冢文陶淵明の歸去來辭入口に膾炙する

者は僅に數篇に過ぎず。秦以前は屈原宋玉の文を推し、前漢には賈誼相如揚雄、後漢には班固張衡は代表者たるべく、三國には曹植を挙げ、西晋には陸機潘岳を多とし、東晋には陶淵明、宋には謝雪運、顔延之梁には沈約を主とせざるべからず。而して賦は潘岳最も多く、宋玉之に次た、詩は謝靈運第一位に居り、顔延之之に次き、曹植沈約陸機等又之に次く、騷は凡て八篇の中屈原五を召め、流石は離騷即ち楚辭の本尊たるに慙ちす。策向、表、啓、彈事の類に至ては任昉の頗る得意とする所なるらし。

斯の如く文選は漢魏六朝の名文集めたるものを以て普通の學者は之を解するを能はず。故に所謂文選學は梁の代より既に興れり。陳隋を経て唐に互り江都に曹憲あり、大に斯學を江淮の間に敲吹す。憲の門人に魏謨公孫羅あり。此兩人よりして李善に傳はり遂に蔓れり。宋史論卷二に曰く、唐世興<sub>レ</sub>學設<sub>レ</sub>科專尙<sub>二</sub>詩賦<sub>一</sub>天下競<sub>二</sub>聲偶<sub>一</sub>趨<sub>二</sub>祿利<sub>一</sub>簾統文選尊爲<sub>二</sub>六經<sub>一</sub>。と此勢を以て唐に至りては、必ず文選を研究せざるべからざるかの如くいへり。唐の中葉る於て最も有名なりし詩人杜少陵が、其子宗武の生日に當り、訓示する辞の中に、詩是吾家<sub>一</sub>事、人傳<sub>二</sub>世上情<sub>一</sub>、熟<sub>二</sub>精<sub>一</sub>文選<sub>一</sub>、理<sub>二</sub>休<sub>一</sub>體<sub>二</sub>見<sub>一</sub>、王應の困學紀聞綵衣<sub>一</sub>輕<sub>一</sub>。これ詩家の文選を必須の資とせる証左なり。朱子語錄にも太白終始學選詩、所以好杜子美詩好者、亦多是效選詩、漸放手、夔州諸詩則不然也」と見ゆたり。嘗に唐代のみならず、宋代に及びても、文選の愛玩は毫も衰へざりしなり。かの「文選爛<sub>一</sub>秀才半<sub>一</sub>」と云ふ諺はるが明証にして、文選だに熟讀せば既に秀才の資格は半は我に具はれりとの意を寓せり。(此語は老學庵筆記にも雪浪軒日記にも講習餘筆日本文庫六にも出てたり。(槐南翁は陸放翁の隨筆に出づといはれき)。

借支那にて木版の起源は文選の刻成にあり。唐末五代の時、詩人母丘儉は未だ諸生たりし時、其友人の文選を貸さざりしを憾み、慨然心約する所ありしが、後孟子に仕へて宰相となり、始めて文選を刻して心約を果せりとぞ。如上、文選は獨り我朝に限らず、彼地にも大に行はれたれば、後世文選の名を襲きて詩文集を編するもの甚多し。例へば、

○宋文選<sup>三卷</sup>編輯者不詳、所選皆北宋之文、自歐陽修以下十四人、惟取其有關於經術政治者、諱賦碑銘之類不載焉。中無三蘇文字、蓋當時蘇文之禁最嚴歟、又其中無三程文、蓋不以士首<sup>註</sup>之也。

○今文選<sup>十六卷</sup>、明經鑑撰、是偏衷錄明人之文、所選自羅邕至李維植、凡三十一人、其前七卷稱今文選、後五卷稱續選。

○續文選<sup>三卷</sup>明湯紹祖編、採自唐及明詩文、以續明明之書、然所錄止唐人明人、無五代宋金遼元所分門目一從文選云々

其他廣文選、廣々文選、三忠文選等數多、四庫全書中に見ゆれを茲に用なければ省く。

又た紹明文選集腋及び、文選錦字録には、文選中の醇正雅馴の句を抜出し、治化政理文德武功よ天文地理蟬奏蟲魚の類に至るまで、一々分類相録したれば、巧辭を衒はんを欲する者には便益此にもなかるへし